

14.長太猪と大沢の関係

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6968

14. 長太猪と大沢の関係

遠 津 有 美 子

1. はじめに
2. 長太猪のテキスト比較
3. 説経話としての長太猪
4. おたいやさま
5. 大沢に見られる長太猪
6. おわりに

1. はじめに

実習に向かう前の事前調査で、「言語文化と学校・社寺」の章を担当し、発表した。その章の中で紹介されていたのがこの長太猪という物語である。他にも多くの民話や伝説が紹介されていたが、この話は他のものと違い非常にストーリー性に富んだ物語であった。そのため、本に書いてあるものを読んだだけでも大変興味をそそられた。その後調査地である大沢へ行き、聞き取り調査を始めた。長太猪の話聞いても、最初は皆知らないと言って話しながらないのだが、じっくり聞いていくと長太猪にまつわる興味深い話がぼつぼつと出てきた。これはまとめればきっと面白い報告書になるに違いないと思い、このテーマを選んだのである。

考察に入る前に、長太猪の大まかなあらすじについて述べる。まず「長太猪」というタイトルについて説明する。これは一見長太という名前の猪の話に思えるがそうではない。元々「長太と猪」と言っていたのだが「と」が抜け落ちて「長太猪」になったのである。「長太」が主人公の木挽きの名前で、「猪」は狸のことを指す。大沢では一般に言う狸のことを猪と呼んでいる。この話は長太という木挽きと年を経た猪の物語なのである。以下の内容は、多種多様な伝わり方をしてる長太猪の話の中で、殆ど話で出てくる箇所を抜粋し、まとめたものである。

天保四年、長太という木挽きが松林を買ってそこに木挽き小屋を建てて住んでいた。昼は仕事をし、夜になると大沢へ帰り、深夜にまた山へ帰るとい生活をしてた。すると山に古くから住んでいた猪が怒り、長太に様々な悪戯をした。しかし、長太はそのまの生活を続けていた。猪は更に怒り、長太に勝負を挑んだ。勝負には長太が勝った。数年後、長太の元に猪の妻である雌猪が復讐にきた。しかし長太はお守りを持っていたため雌猪は手が出せない。そこで雌猪は長

太に夫の霊を弔う法会を営んでくれと頼み、長太は靈高寺に頼んで法会を行ってもらった。その後雌貉は長太に礼を言い、長太の前に現れることはなくなった。

以上が長太貉の話の概略である。この物語の特徴として大きく三点が挙げられる。実話が元になっていること、ストーリー性に富んでいること、様々な伝わり方をしていることの三点だ。調査地である大沢で長太貉の話は事実として伝えられ、長太の子孫だと言われる人物や舞台となった寺も現存している。聞き取り調査をしているときも、「Tさんの家が長太の子孫だ」とか、「Hさんの家が長太の恋人の子孫だ」という話をよく聞いた。ただ、長太とこの恋人が結婚して子供をもうけたと伝えている話もあるが、Hさん(80歳代男性)に聞いたところ、実際はTさんとHさんの家の間に姻戚関係はない。

また、ストーリー性に富んでいることも大きな特徴の一つである。ただ長太と貉が戦うという話ではなく、貉の妻が復讐に来たり貉の霊を弔う法会をしたりと場面が二転三転する。そして、この物語はただの民話として語られているだけではなく、説経話にもなっている。物語の中で出てくる靈高寺という寺で、説経話として語られてきたのだ。更に政府に提出した書類と思われるものも見つかっているなど、実に様々な形で長太貉の物語は現在に伝えられている。

長太貉の話は民話、説経話、書類と様々な形で伝わっているが、それぞれで伝えられている内容が少しずつ違っている。本章ではどの点が異なっているのか、何故その違いが生まれたのか、長太貉の話は大沢の人々にどのような影響を与えているのかについて考察する。

2. 長太貉のテキスト比較

先にも述べたように、長太貉の話は民話、説経話、語りなど様々な形で伝わっている。最近では絵本にも様々なバージョンで書かれている。ここではそれらの中から長太貉の舞台である靈高寺に伝わる説経話と、橋爪家写本、『鳳至郡誌』に載っている成瀬氏の覚え書きとを比較する。

靈高寺では長太貉の話を説経話として語ってきたが、それは先代住職までであり、現在では語られていない。そのため現住職に説経話として語っていただくことは出来ず、長太貉の話の内容を話していただいた。また、橋爪家写本は天保四年(1834年)秋、長太が49歳の時に語り、筒井家が書き留めたのを橋爪長右衛門が一晩で書き写した物である。橋爪長右衛門は筆の立つ人物として知られた人で、橋爪家の人はこの写し書きを字のお手本として見せられたこともあるほどだ。写本の現物は変体仮名で書かれており読解が困難なため、平成十年(1998年)に輪島市西保公民館が写本を活字で書き改めた物を参考資料として使用した。成瀬氏覚え書きは藩の人持組であった成瀬氏の所蔵文書から発見されたもので、当時の藩吏が長太から聞き取った書類だと思われる。書かれた日付は文政五年(1823年)となっており、この三つのテキストの中では最も古い物である。

この三つのテキストを比較してみると、大きく違う点が三点ある。(1)長太が村へ帰った理由、(2)

雌貉が長太を殺しに来た際に長太を守ったもの、(3) 法会の時期の三点だ。以下ではこの三点の違いが生まれた理由を、それぞれのテキストを作った人物の立場に着目して考察していく。

まず長太が村へ帰った理由だが、靈高寺に伝わる話では恋人に会いに村へ帰っていたとされるが、橋爪家写本では友人と酒を飲みたくて村へ帰ったとされている。写本を行ったのは橋爪家の長右衛門である。そして長太が会いに行った恋人は長右衛門の妹のおたつだったと伝えられている。そのため、長右衛門が自分の妹が長太とこっそりあっていたことを隠したいが為に、写本の際にわざとそのことを書かなかったのではないかと大沢に住む K さん（70 歳代男性）は語った。しかし、大沢の人たちに長太貉の話を知ると、殆どの人が長太の子孫と言われている家とおたつの子孫だと言われている家とを答えていたので、あまり効果はなかったようだ。

次に雌貉から長太を守ったものだが、靈高寺の説経話では浄土真宗で唱えられる「南無阿彌陀仏」の文句を靈高寺の住職が体中に書いてやり雌貉から守ったとされているが、橋爪家写本では観音様の札となっている。靈高寺は「観音様の札」というのが伝え間違いで、南無阿彌陀仏の文句が長太を守った方が正しいと主張している。しかし橋爪家写本のみならず他のテキストでもそのような記述は見られず、「観音様の札が長太を守った」と言う方が定説になっている。

靈高寺の現住職によれば、彼の有名な小泉八雲の小説「耳無し芳市」の元ネタは、この「長太貉」なのだという。靈高寺の住職に体中に「南無阿彌陀仏」という経文を書いてももらったおかげで雌貉に殺されずに済んだという話は、確かに耳無し芳市の話と酷似した内容である。また、第 3 節で詳しく述べるが、幕末以降靈高寺の住職は関西方面にまで説経をして回っていた。そして、小泉八雲は 1894 年に神戸へ移住しているので、そこで長太貉の説経話を聞いたと考えられなくもない。逆に靈高寺の方が小泉八雲の耳無し芳市にヒントを得て長太貉の話を作ったとも考えられるが、数度の火災と資料の流出のため靈高寺には詳しい資料が残されていないので断言は出来ない。

最後に法会を行った時期だが、靈高寺では 2 月 27 日となっているが、写本では 11 月 15 日と大きく異なっている。雌貉が勝負をしると言ってくる時期は靈高寺の話でも写本と同様 11 月となっているが、法会を行った時期が三カ月以上経った 2 月 27 日というのには作為性を感じる。

27 日は親鸞聖人の速夜である。速夜とは故人の命日の前夜にお参りをする事である。そして浄土真宗の開祖である親鸞聖人の命日が 11 月 28 日であるため、浄土真宗ではしばしば 27、28 日に報恩講と呼ばれる行事が行われる。真宗大谷派である靈高寺では 2 月 20 日から 28 日にかけて「おたいやさま」と呼ばれる行事を行っているため、それと関連付けるために法会の時期を 2 月 27 日としたのではないかと考えられる。このおたいやさまと呼ばれる行事については第 4 節で詳しく述べる。

以上の三点だが、三つのテキストの内最も古い成瀬氏覚え書きの中にはどれも記述がない。長太が大沢に夜な夜な帰っていたという話もなければ、雌貉が復讐に来たという話もないのである。そのため長太の色恋沙汰の話や、雌貉が復讐に来たという話は物語を面白くするために脚色されたものと思われる。

また、殆どのテキストで長太と戦ったのは「貉」だとされているが成瀬氏覚え書きでのみ「狸」と

表記されている。先にも述べたとおり、大沢で「貉」と言えば「狸」のことを指すので結局表している動物は同じなのだが、大沢の人が作った説経話や私的に書いた写本と、書類として書いたものの違いがここに現れているのではないと思われる。

以上のように複数のテキストを比較していくと、制作者の意図が見えてくる。それぞれのテキストにどの部分がかかれていてどの部分がかかれていないか、もしくはどのように変形しているかを比べることによってテキストの持つ性格や制作者の立場、制作者が隠したかった事、語り継いで欲しかった事は何なのかが見えてくる。ここで挙げた長太貉のテキストは、信仰を話の中心に置きたい霊高寺という宗教団体と、話の中に出てくる登場人物の親族と、藩の役人という三つの全く異なる立場の人が作ったため、それぞれに顕著な特徴が出ており、非常に興味深いテキストだと言える。各テキストにおける三点の相違を表1にまとめる。

表1 長太貉の物語のテキストによる違い

	長太が帰った理由	長太を守ったもの	法会の時期
霊高寺説経話	恋人に会いに行った	南無阿弥陀仏の経文	2月27日
橋爪家写本	友人と酒を飲みに帰った	観音様の札	11月15日
成瀬氏覚え書き	記述なし	記述なし	記述なし

3. 説経としての長太貉

霊高寺は「長太貉」の話の舞台となった寺として他県でも知られている。なぜこの石川県の小さな集落の民話が他県にまで知られているかと言えば、それは霊高寺自身の功績と言っても過言ではない。舞台となった霊高寺の住職が、幕末の頃に大沢に伝わる長太貉の話の説教話に直し、大沢を始め能登一円、大阪、神戸など各地で説経をして回ったのだ。そして説経を聞いた人が更にその話を人から人へ語っていき、長太貉の話は広く知られるようになったのである。

説経とは、古くは「辻説法」とも呼ばれ、僧侶が各地を歩いてまわり仏教の教えを説く布教活動のことである。この時教えをわかりやすく伝えるために用いられる物語が、長太貉のような説経話である。

では、なぜわざわざ長太貉の話の説経話に変える必要があったのだろうか。それは、霊高寺の住職が大阪方面にまで説経をして回っていたことと関係がある。当時の霊高寺の住職である麟界氏は「石山合戦」の説教話を得意としていた。しかし、大阪では石山合戦の話は御当地と言うこともあり、皆が話を知っていて受けが悪かった。そこで何か新しい説経話を作れないかと考え、思いついたのが自寺に伝わる「長太貉」の話である。現在は説経をすると一回につき固定の布教料がもらえるが、当時は説経の際に得た賽銭がそのまま収入となった。そのため受けない説経話を続けるわけにもいかず、

考え出されたのが「長太猪」という説経話なのだと言われている。霊高寺の住職が大阪へ説経に行っていたこと、大阪で石山合戦の話が受けなかったこと、当時の給料が歩合制であったことが重なり、「長太猪」という大沢を代表する説経話が誕生したのだと考えられる。

当時の説経の様子を撮影、もしくは録音したものが残っていれば良かったのだが、長太猪の説教が盛んに行われていたのは約五十年前、先々代の住職の頃であった。そのため、当時の映像どころか現在では実際に説経話を聞いた人もほとんどおらず、Hさん（80歳代後半男性）によりややく当時の話を聞くことができた。

50年ほど前までは大沢でも説教が盛んに行われており、「御七夜」や「おたいやさま」などの行事の際に様々な説経話が語られた。御七夜とは開祖である親鸞聖人に感謝をするためのもので、親鸞聖人の命日である11月28日の前後7日間に渡って行われる。西本願寺では旧暦の11月28日に合わせて行うが、霊高寺では住職の都合もあり、現在では12月2日から8日にかけて行われている。なお、おたいやさまについては第4節で詳しく触れる。

説経が行われるときは多数の老若男女が集まったが、長太猪の話がされるという時は特に大勢の人が集まり、百人ほど入るお堂が人でいっぱいになったという。多いときにはお堂の床板が抜けるほどだったそうだ。先々代の住職はとても話がうまく、長太が木挽きをする場面ではお堂の柱によじ登り、長太が猪と戦うシーンなどは身振り手振りを交えて語るという具合だったため、何度長太猪の話を聞いても飽きなかったという。また、Hさん自身にも長太猪の話を語っていただいたのだが、それも身振り手振りを交えたものであった。特に長太が猪を倒すために鉞を振り下ろす場面などは手を大きく振りかざし、臨場感たっぷりに語って下さった。更に霊高寺の方が説経話を語る時の特徴としてあげられるのが、節を付けて語るという点である。現住職の方も所々に節を付けて語って下さったのだが、それは語りと言うよりは浪曲に近く、聞く者を引きつける語り調であった。霊高寺の方はお経を読む際にも節を付けることがあるらしく、他の寺の方から「教えてくれ」と言われることもあるそうだ。

説経話として語られるときは、必ず数回に分けて語られたのだという。説経に行くときはどこか別の寺に布教師として呼ばれて行くことになるのだが、昔は徒歩で移動していたため一日だけ説経をしに行くということではなく、必ず何日間かに渡って行われた。説経を行う側としてはなるべく毎日聞きに来て欲しいので一日で全て話してしまうということはせず、話の盛り上がるところで切り、「続きはまた明日」と言って翌日に続くようにしていたという。そして翌日話し出すときは前日の話の内容を少し話してから新しい部分の話し出したのだそうだ。「話を途中で切ってしまうのは今で言うコマースのようなもの。日を重ねるごとにお客さんが増えていくか減っていくかが布教師の腕の見せ所」と現住職は語った。以前は複数日に渡って行われていた説経だが、車が普及した現在では日帰りのものが多くなっている。そのため、最近ではこのように翌日も人々が聞きに来てほしいと思えるような話をする技術を持った人が少なくなったと住職は語った。

また、説経話として語られる長太猪の話は信心の話に関連づけられている部分が多いという特徴が

ある。Kさん（70歳代男性）は寺で聞く話と近所のおじいさんに聞く話はずいぶんと感じが違い、あらゆる事を仏様の話に結びつけて話されていると感じた、と語った。例えば、雌貉が長太に復讐に来るが結局長太を取り殺さずに夫の法会を開いてもらうことで事を納める話は、仇を忘れることによって輪廻から解放されるということなのだと言われる。発句経というお経の中には仇を仇で返しては結局いつまで経っても仇はなくなり、忘れることによってのみ仇から解放されるのだという教えがあり、それをわかりやすく伝えるためにこの長太貉の話が使われるのだそうだ。

多くの人に愛されていた長太貉の説経話だが、時が移るにつれて語られなくなってしまった。語られなくなった理由として大きく二つの点が挙げられる。一つは説経を聞きに来る人が減ったこと、もう一つは長太貉の説経話が霊高寺内で継承されなかったことだ。

まず、説経を聞きに来る人が減った理由について述べる。大沢にバスが通るようになった昭和36年（1961年）頃までは、御七夜やおたいやさまのお参りに来る人も多かった。その頃まではみんな徒歩で霊高寺まで来ていたため、帰りのバスの時間を気にすることもなく、お勤めは人々が集まった頃を見計らって始められていた。しかし、バスが運行されるようになると帰りのバスの時刻までにお勤めを終わらせる必要が出てきてしまったために、人が集まっていなくても定時にお勤めを始めるようにした。すると、わざわざ紋付き袴の正装をして寺まで来ても、着いた頃にはもう終わってしまっていたということが出てきたために、人がぱったりと来なくなってしまったのだという。「実際は殆どの人が歩いてきていたからバスの時間を気にする必要はなかったのですが、父（先代住職）は時間うるさい人だったので」と現住職の方は語って下さった。

次に霊高寺内での継承が起らなかった理由だが、これは少々長いスパンでの話になる。大沢で調査を行っていた際に気になる点の一つがあった。実際に霊高寺で説経話を聞いたという人は80歳代以上の人が殆どだったのだが、霊高寺の先代住職も説経話をしていたという話をよく聞いたのだ。この謎を解く鍵は、説経を行っていた地域にあった。

先々代の住職は大沢周辺でもよく長太貉の説経話をしていたそうだが、先代住職の方は北海道や福井、京都、大阪など遠方で説経話をすることはあったが、地元大沢で説経をすることは殆どなかったという。そのため、地元根付いていたはずの長太貉の話を実際に聞いたことのある人が少なくなってしまったのだ。すぐ隣の赤崎や上大沢といった集落出身で嫁いで大沢に来た人などは、大沢に来るまで長太貉の話を知ることがなかったという人が殆どだった。また、このように遠方の寺へ説経をしに行っていると自然と大沢の方の家を空けることになる。北海道などに行く場合は三ヶ月から長く半年ほど家を空けることもあったそうだ。そのため、父親からあまり話を聞く機会がなく、現住職へは長太貉の説経話は継承されずじまいとなってしまったのだという。霊高寺の先祖の方が「遠くばかりでなく地元での布教も大切にしなければいけない」とおっしゃっていたそうだが、現在の大沢は残念ながらその危惧が当たってしまった状態だと言える。長太貉の説経話が語られていたという事を知っている人や大まかな粗筋を知っている人はいるが、Hさんのように筋道立って一つの物語として話れるという人はごく少数だ。霊高寺の働きにより、現在でも大沢で長太貉の知名度が高いことは確

かだが、その詳しい内容まで記憶している人は殆どいないというのが現状のようだ。霊高寺は説経によって長太猪の話を遠方へ広めていったと同時に、説経によって長太猪の話を大沢からなくしてしまっただといえる。

4. おたいやさま

霊高寺では2月20日～28日にかけて「おたいやさま」と呼ばれる行事が行われる。この名前は、長太と戦った猪の霊を弔うための法要が元になったのだと霊高寺の住職は言う。長太猪の話の中で、雌猪は長太に夫の法要を開いて霊を弔ってくれと頼むのだが、このとき条件を付ける。魔物は日中活動できないので、法要を開く時間帯を「逮夜」にしてくれと言うのだ。「逮夜」とは、仏教の言葉で昼過ぎからのお勤めのことを指す。こうして逮夜の時間帯に行う法要と一緒に猪の霊を弔ったのがこの「おたいやさま」の名前の起源となる。話の中では猪の為に法要を開いたような書き方をされているが、物故者のために元々霊高寺で行っていた法要の中で一緒に猪の霊も弔ってあげたのだと霊高寺の住職は語った。この霊高寺で元々行っていた法要は、本来は祠堂経と呼ばれるものである。霊高寺では1月と2月の年二回祠堂経を行っており、二月の祠堂経で長太と戦った猪の霊も一緒に弔ってあげたのだという。

お勤めを始めるときは、寺の半鐘を叩いて合図としていたのだそうだ。最初は大きく七回、次に小さく七回、さらに五回と三回をそれぞれ大小鳴らしてお勤め開始の合図となる。昔は半鐘を鳴らしていたが、今は農作業をしている人の迷惑になるから鳴らさないのだと住職は語った。かつてはおたいやさまの時に布教師を招いていたそうだが、現在では参加者が減ったため呼ばなくなってしまったのだという。以前は人が大勢来ていたおたいやさまも、現在では一週間で10人ほどしか人が来ない。また、Hさん(80歳代男性)によれば、昭和40年代頃までは27日には餅お講を行っていたそうだ。餅お講とは餅や干し柿などを持ち寄り競りにかけるもので、集まったお金は本山へ納められる。また、お仏供米を炊いたり、けんちん汁を作ったりして参加者みんなで食べていたのだそうだ。みんなでご飯を食べることによって、大沢の人々がコミュニケーションをとる場になっていたのだと霊高寺の住職は語った。更に、この機会に結婚の縁組みがされたり、新しく大沢へ嫁入りしてきた人が正装をして挨拶に来たりもしていたのだという。

2007年の2月27日に、実際におたいやさまの様子を見学させていただいた。霊高寺に着くとまず、住職のお経をあげる声が聞こえてきた。更にお堂の中へ入っていくと仏壇が普段よりも豪華に飾り付けられており、その横で住職がお経をあげていた。お参りに来る人は殆どいないと聞いてはいたが、お堂にいたのは住職のみで、お参りに来ている人が一人も見あたらなかったのには驚いた。

仏壇には椎茸、人参、ワカメ、ミカン、ナッツ類、お菓子などのお供え物がされていた。海の物、根の物、果物はかならずお供えをするのだそうだ。また、松、梅、菊、菜の花などのお花も供えられていた。松は綺麗にハケ造りの形に整えられていた。正面の仏壇だけではなく、後ろに掛かっていた

親鸞聖人や蓮如上人の掛軸にもお花が供えられていた。正面の仏壇にある二本を除いて、松のハケ造りは全て住職が自分で作ったのだという。近くで見ないと分からないが、別々の枝が細いワイヤーでつなぎ合わされて作られていた。また、梅は造花であった。浄土真宗では、お花を供えるときにまだ咲いていなければ梅は造花を使っても良い決まりになっているのだと住職は言った。昔はツバキやボタンなど花全体が落ちる花や、トゲのある花は使ってはいけなかったそうだが、現在ではあまり厳しくないのだという。また、花とは別にシキビという木も供えられていた。シキビは毒性のある植物で、その毒のために死者に悪霊が取り憑かなくなると考えられている。この木は大変貴重なもので、最近では本物のシキビを使うことは殆どないそうだ。仏壇の前には米も供えられていた。これはお仏供米と呼ばれる物で、お参りに来た人がその家からお米を持ってきて寺へ寄進するのだ。各家がだいたい五合から一升ほどの米を持ってくる。今年は全部で四斗ほどのお仏供米が集まっていた。この米が寺の一年分の食糧になるのだそうだ。しかし、様々な家の米が混ざるのであまり美味しくはないのだと冗談めかして住職は語った。

お堂の周りを見ると、壁に白い紙がいくつも貼られていた。紙には名前、地名、金額が書かれていた。これは蝋燭代としてお金を持ってきた人の名前と金額、その人の住んでいる地名が書かれているのだ。こうして集められた蝋燭代は寺の経費や村の経費にするのだそうだ。紙の枚数は百枚を超えており、その人数分は確実にお参りに来ているということになるのだが、先に述べたようにお堂にお参りに来ている人は一人も居なかった。殆どの方がお経などは聞いていかず、朝のうちにお金だけ置いていくのだという。

住職がお経を読む声と共に、カンカンという固い物を叩く音が聞こえた。これは御木（おんぎ）と呼ばれるもので、お経を読む際に拍子木のように打つ。ほぼ一定のリズムで打たれているのだが、時々調子が変わる。住職に聞いたところ打つ箇所はあらかじめ決められており、それに合わせて打っているのだそうだ。また、お経の節目節目で大きな鉢のような物をゴーンと叩く。これは経鑿というものだが、靈高寺ではガマモンと呼ばれている。御木とガマモンでリズムを取りながらお経は読まれていく。読まれるお経にも順番がある。まずは伽陀（かた）という物を読む。これは仏様を呼ぶためのお経なのだそうだ。その後浄土三部経というお経が読まれる。そしてそのお経を読む合間に長太猪のような説経話を入れて、仏の教えが誰にでもわかりやすく説明されるのだ。その日は他にお参りをしている人も居なかったため、説経話まで聞くことは出来なかった。また、住職の着ている衣も普段とは違っていた。補充調査のために靈高寺を訪ねた時住職はいつも黒い衣を着ていたが、この日は普段と違い茶色の衣を着ていた。お坊さんの衣の色には意味があり、階級によって着られる衣の色が違うのだそうだ。そしておたいやさまのような行事のあるときには、自分の着られる最高位の衣を着るのだと住職は語った。

現在ではお参りに来る人も殆どおらず、長太猪の説経話もされていないが「おたいやさま」という名前は残されていた。長太猪の舞台となった寺としてこの名前を維持して欲しいと思った。

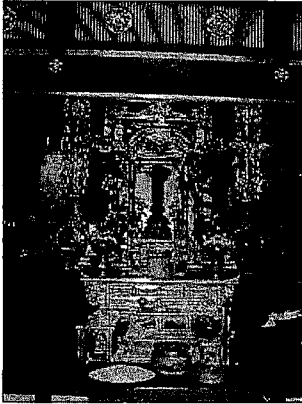


写真1 お堂の仏像

大沢の霊高寺にて撮影。左手前の白いものがお供米。



写真2 お供え物の花

大沢の霊高寺にて撮影。よく見ると複数の松の木がつなぎ合わされている。

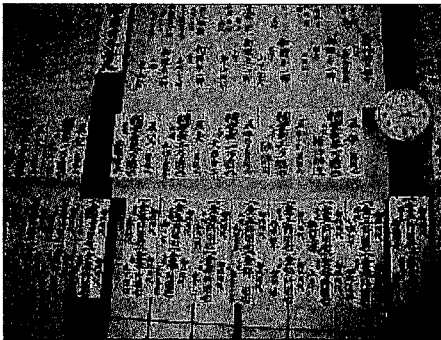


写真3 霊高寺にて撮影。蟬燭代を持ってきた人の名前が書き連ねられている。

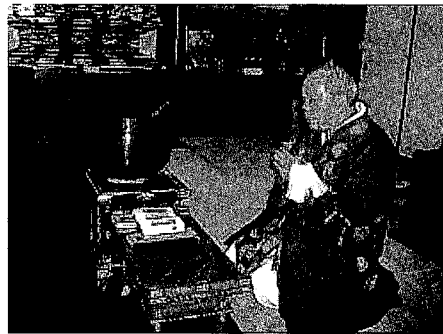


写真4 読経の様子

大沢の霊高寺にて撮影。黒い鉢のような物がガマモン。

5. 大沢に見られる長太猪

今まではテキストとして残っている長太猪の話について述べてきたが、第六節では「語り」として伝えられる長太猪の物語、および長太猪の話が大沢の人々に与えてきた影響について述べる。

2007年現在では家庭内で長太猪の話が語られるということは減多にないが、70歳代以上の人が小学生の頃は、祖父母や知り合いのおじいさん、おばあさんがよく長太猪の話をしてくれたのだという。長太猪の話がされるのは主に冬だったとMさん(70歳代男性)は語ってくれた。農業も漁業も出来ない冬になると、出稼ぎへ行くことも出来ない老人は時間をもてあます。そこへ子供達が学校帰りなどに寄り、物語をねだるのだ。ここでも説経の場合と同様に他の話と比べて長太猪の話は大人気だっ

たという。家庭内で語られる場合も、やはり冬場に語られる事が多かったようだ。どのようなシチュエーションで聞いたかという問いに対して殆どの人が囲炉裏を囲みながら長太猪の話をしてもらったと回答した。そして語り手はやはり働き盛りで忙しい両親ではなく祖父母が多かったという。長太猪の物語は、ただのコミュニケーション手段として語られていたのではなく、冬になり何も出来ることのなくなった老人の一種の「仕事」として存在していたのではないかと思われる。

また、語り手の性によって強調して話される箇所が違つたと K さん（70 歳代男性）は述べた。おばあさんが長太猪の話をするときは「動物でも殺したら吊ってやらなければならない」というような信心に関する部分が強調して話されるが、おじいさんが話すときには長太の強者ぶりを大いに語り、長太と猪の格闘のシーンが強調して話されたそう。K さんは「女の人の方がよくお寺に通っていたから信心深い話になるのではないか」と言っていた。

冬の時期以外にも浜で夕涼みをしているときや、田んぼの水の様子を見に行った帰りに長太猪の話をしてもらったそう。K さんが小学生の頃、大沢では 6 月～8 月の昼少し前くらいに、サワガニが田んぼの水路に穴をあけていないか見に行っていた。その帰りにお地藏さんの前で休憩をするのだが、その時におじいさんが物語をしてくれたのだという。ここでもやはり長太猪の話が人気であった。このように話すときも説話同様必ず数回に分けて話してくれたのだそう。話が続く時は、前回までのあらすじを語ってからその日の分を話し始めた。回数はまちまちだが、大体七回ぐらいにわけて語られたという。人によって話す内容が変わるのだが、中でもバリエーションに富んでいる場面は長太と猪が戦っている場面だったそう。長太猪の人気の秘訣とも言える箇所が、この戦闘場面だ。子供達は信心の話ではなく、長太と猪の戦っている話を聞きたがった。そのため、この戦闘場面を如何に臨場感に溢れて面白く言うかが語り手の上手い、下手の分かれ目となった。語り手は、子供を喜ばせるために自分なりに戦闘シーンを盛り上げようと必死になる。また、戦闘シーンは付け加えたり省略したりが比較的容易に出来るので、話をするときの時間調節のためにも様々な語り方がされたのではないだろうか。その結果元の話に様々な脚色がつき、多種多様なパターンの長太猪の話ができあがるのだと考えられる。実際大沢の人たちに聞いてみてもこの戦闘場面には様々なパターンがあるし、絵本などを見ても戦闘場面の展開はまちまちになっている。例えば、T さん（60 歳代男性）の話では猪が大きな牛に化けたり、怪物に化けたりして長太の邪魔をしたという話になっており、K さん（70 歳代男性）の話では小屋をどンドン叩いたとなっている。また、『鳳至郡史』（829 ページ）に載っている話では何者かに母親が危篤だと言われたとあり、『西保村史』（362 ページ）にある話では松葉平が一面火の海になったり、さるひらの道に大石が転がってきたりしたと書いてある。

また、長太猪の話は話を聞いたときの年齢によっても内容が違っていたと K さん（70 歳代男性）は語った。小学生ぐらいの小さい頃に長太猪の話を聞いたときは長太が大沢へ帰ってきていたのはお酒を飲みたかったからだとか聞かされていた。しかし、青年団に入った頃、異性への関心が目覚めた頃に青年団の先輩などから実は長太が大沢へ帰っていた理由は女の人に会いに来ていたからだ、と聞かされたのだという。どうやら、子供に語る物語としての長太猪の話と、少し大人向けの物語としての

長太猪の話があったようだ。

そして、教訓話としての性格も長太猪の物語は持っているように思われる。大沢の人々に長太猪とはどのような話かと聞くと、殆どの人が長太が雄猪の霊を弔う法要を開いてやったところまでを話す。そして、「この話は畜生の命でも大切にしないとすることをつたえている」とか、「人間が山を荒らしてはいけないということを教えてくれている物語だ」といった風にそれぞれが自分なりに物語を解釈して話してくださった。ただおもしろい民話として伝えられているだけではなく、人間と自然との関わり合い方を教える物語としても長太猪の話は語り継がれている。

以上のことから、長太猪の話は話し手によっても聞き手によっても伝えている内容が変わっていることが分かる。長太猪という物語は、一つの話ではあるが、話し手が伝えたい内容、聞き手の年齢や聞きたがっている内容によって様々に変化している物語のようである。

6. おわりに

今回長太猪の話について調べてきたが、調べていく内にその物語自体のおもしろさ、物語の伝わり方の独自性にどんどん興味を引かれていった。しかし調べながらふと不安になったのは、今後長太猪という民話が大沢で語られなくなってしまうのではないかということだ。そのように思った理由は、長太猪の話をする機会が減っていることと、長太猪の話を語れる人がいなくなってきているということだ。

まず話をする機会が減ったということについてだが、長太猪の話が、農閑期である冬に、時間に余裕のある祖父母によって語られてきていたと言うことは先に述べた。これが現在も可能かと言えば、答えは否である。農業の兼業化が進む現在、農閑期はあってもその間に仕事がないわけではない。冬にもやるべき事は多数ある。更に、現在の大沢では若い人たちは外に出ていってしまい、高齢者の夫婦二人暮らしが多い。そのため、孫に語ってやれるという機会自体が殆どないのが実状だ。インタビューの際に、子供や孫に長太猪の話を聞かせることはなかったのかという質問に対して「そうだねえ。話してやってなかったねえ。今思うと話してやっておけば良かったと思うけど忙しくて話せなかったよ。」と寂しげに答えてくださったのが印象に残っている。また、「最近の子にこんな話をしても面白がらないよ」という人もいた。

次に、話を語る人が減ったということについて述べる。霊高寺で説経が行われたことによって長太猪という民話は広まった。住職自らが語って歩いたのはもとより、説経話として聞いた人がその話をさらに別の人へと語っていったからだ。しかし、説経話として語られなくなったことにより長太猪の話を直接聞いたことのある人が減り、同時に長太猪の話を語ることの出来る人も減ってしまったのだと考えられる。今回の調査でなかなか長太猪の話を語れる人に出会えなかったことも、語ることの出来る人が減っていることを如実に表している。

徐々に語り継がれられなくなっている長太猪の物語だが、こんなに特色のある物語が消えていって

しまうのは非常にもったいないと思う。この報告書が、少しでも多くの人が長太猪の話に触れるきっかけとなればいいと思う。

また、この報告書を書くにあたりご協力してくださった大沢の皆様に、この場を借りてお礼を言わせていただきたいと思う。お忙しい中時間を割いてインタビューに答えてくださった方、長太猪の話を実際に語って下さった方、そして再三に渡る再調査を快く受けて下さったかたに心から厚く御礼を申し上げたい。拙い報告書ではあるが、こうして形に残すことで皆様のご協力に少しでも報いられればと思う。